

共観福音書であるマタイ福音書とルカ福音書は、同じ共観福音書の一つであるマルコ福音書をベースにして、自分たちの独自の資料や考え方を追加してイエスの生涯を描いています。ですから、マルコ福音書と比較してみると、その福音書独自の福音理解が浮かび上がってきます。例えば、ルカ福音書23章32節では、イエスが十字架にかけられるために「されこうべ」にひかれていく際に『二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った』とあります。ところが、元になったマルコ福音書15章27節を見ると、『イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた』と結果だけが書かれています。ルカ福音書では十字架にかけられていく前の二人の犯罪人のことが具体的に書き加えられているのです。

その具体化は、ルカ福音書の場合、23章39節以下でも、犯罪人の一人がイエスをのしった場面でも出てきます。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。すると、イエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園（パラダイス）にいる」と言われた。』となっていて、マルコ福音書にはない場面が書き加えられているのです。

最後の晩餐において、イエスは、イザヤ書53章12節の預言のように、イエスが十字架の処刑場に2人の犯罪人と一緒に連行され、2人の犯罪人を左右にして十字架につけられたのは、イザヤ書に預言された神の御意志の成就であるというように描かれています。イザヤ書53章12節（1150頁）を見てください。12節の3行目『彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。』とあります。

ルカ福音書22章37節で、イエスが『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する』と言った言葉は、このイザヤ書53章12節の預言の成就のことなのです。イザヤ書53章12節の6行目『背いた者のために執り成しをした』の「背いた者」とは、「咎ある者」のことで、犯罪者のことです。ルカ福音書でイエスと一緒に十字架につけられた犯罪人のことがイザヤ書53章1節で預言されていた背いた者のことで、その予言がイエスの十字架刑死の場面で実現したと解釈しているのです。そして、ルカ福音書23

章34節でイエスが『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』と執り成しの祈りをしていられることも、同じくイザヤ書53章12節の6行目の「背いた者（咎ある者）のために執り成しをした」という預言の成就だとルカ福音書を書いた記者は考えたのです。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」という執り成しの祈りが、イザヤ書53章12節の預言の成就だとルカ福音書の記者が解釈したことで、実はキリスト教信仰の根幹である「十字架の贖罪論」が生まれたのです。

イエスが2人の咎ある者（＝犯罪者）と共に十字架につけられたというのは歴史的事実でしょう。イエスが犯罪者と同じである罪に問われていることを民衆に印象づけるために一緒に処刑したのです。けれども、それを解釈したルカ福音書の記者は、イエスが彼らの「罪を負い」、彼ら罪人の代理人として、彼らの罪の赦しを父なる神に執り成しをした行為をしたと考えたので、『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』と執り成した言葉を書き加えたのです。しかも、それはイザヤ書の預言が実現したものとして描いているのです。そして、「彼ら」というのは、2人の犯罪人のことだけでなく、イエスを拒否して十字架につけたユダヤ教の宗教指導者たちや逃げた弟子たちをも含んでいると考えたのです。

ルカ福音書の十字架刑死の場面での嘲りを見るとそのことがわかります。イエスの執り成しの祈りのあとの23章35節以下を見ると、議員たち（＝役人たちのこと）はあざ笑って『他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい』と言います。兵士たちも『お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ』と侮辱し、さらに犯罪人の一人が『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ』とののしっているのです。このように、十字架上のイエスを拒否する者たちの嘲りの言葉が皆似ている表現になっているのも、弟子たちがイエスを見捨てて逃げてしまった裏切りも、すべてイエスが彼らの「罪を負い」、彼ら罪人の代理人として十字架上で死んでいった贖罪の死であったとルカ福音書の記者は解釈したのです。そうでなければ、イエスの十字架は理解できなかったのです。

来週、イースターを迎えますが、イースターはイエスの復活を祝う日です。けれども、ルカ福音書が示しているように、イエスが負った罪は誰の罪なのかというところをもう一度受け止め直してみたいものです。信仰者はこのイエスの十字架に表された罪を負った姿が、十字架につけた直接的な人たちだけでなく、今現在信仰している者たちの罪をも担って十字架にかかってくださったと理解してきました。自分の十字架を負って生きていく信仰者の覚悟のなかにも見出してきています。すべての人の罪を担うというかたちで、神の愛の意思を表してくださっていることに感謝したいものです。